

(様式 1)

視 察 報 告 書

令和 8 年 6 月 2 6 日

鳥取市議会議長 星 見 健 蔵 様

鳥取市議会文教経済委員会
委員長 石田 憲太郎

本委員会は、下記のとおり委員を派遣し、行政視察（調査）を実施したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

1 期 間	令和 8 年 4 月 1 3 日から令和 8 年 4 月 1 5 日まで
2 派 遣 先 及び視察 (調査) 内容	<徳島県徳島市> ○阿波踊りにおける観光振興への取組について <兵庫県南あわじ市> ○学ぶ楽しさ支援センターについて <BIWAKO AQUA PONICS> ○アクアポニックスについて
3 派遣委員 の 氏 名	石田憲太郎、大谷 達也、水口 誠、金田 靖典、 西村 紳一郎、長坂 則翁、砂田 典男
4 委員会所見	別添のとおり
5 参加者所見	別紙のとおり

徳島県徳島市	○阿波踊りにおける観光振興への取組について ・本市の鳥取しゃんしゃん祭の観光客数を増やしていくためにも、山陰エリアの松江水郷祭、米子がいな祭等との日程調整を行いながら、観光客が周遊できる取組が必要と考える。 ・まつりを活用した関係人口づくりの仕組みをしっかりと作り上げていると感じた。また、阿波おどりの伝統文化を次世代に継承しゆく人材の育成のため、令和元年より有名連を市内小学校に派遣し歴史や文化、踊りの体験を実施しており（R 7 12 校計 32 回、約 2,364 人）、伝統文化として継承する流れの構築は、しゃんしゃん祭りを本市の誇りとして定着させるために必要なことと感じた。 ・阿波おどりエコアクションの取組は持続可能な阿波おどりの浸透と未来へのまちづくりとして注目したい。素晴らしいことであり見習いたいものである。 ・阿波おどりの伝統文化を次世代に継承し、歴史や文化を発信することを目的に、市内の小学校に有名連を派遣し、子どものころから阿波おどりの魅力に触れる事業を行っている。しゃんしゃん祭りと比べ動員規模が違う。 ・鳥取市においても、しゃんしゃん祭りを軸としつつ、依存するのではなく、日常的に人が滞留・交流できる空間整備を行うことで、年間を通じたにぎわい創出につなげる必要がある。 ・既存の観光資源を点として捉えるのではなく、動線として結びつけることで、滞在時間の延長や消費拡大を図る視点が重要である。 ・鳥取市においても、学生が主体的に関われる役割を明確化し、運営や企画に参加できる仕組みを整備することで、若者の定着や将来的な関係人口の増加につながる可能性がある。 ・しゃんしゃん祭りをはじめとする地域資源の価値を高めるためには、単なるイベント運営にとどまらず、関係人口の拡大や持続的なにぎわい創出の視点を取り入れた施策展開が求められる。 ・コロナ以前にも、集客が低迷した時期があったようだが、関係人口を多極的に広げていったことが、町を挙げての取組となっているのがよく分かる。 ・同じ時期に行うしゃんしゃん祭りの取組、見せ方、参加の仕方など、参考にすべきことが多々あった。
--------	---

兵庫県南あわじ市	○学ぶ楽しさ支援センターについて ・子どもは将来の日本を背負う大事な存在である。そのためにも教育は非常に重要である。近年、複雑化する社会構造の中で不登校児童・生徒が急増する中であって、学びを保障する（特に義務教育）ことは重要な課題である。 ・廃校の利活用という視点では、本市でも統廃合により増加する廃校の新たな活用方法の一つとして考えられる。防災ジュニアリーダーとして育成された児童生徒が、地域において自分にできることは何かを考え、地域に提案していくという取組は、学ぶ楽しさという理念が形になったものであり、学べき取組と感じた。 ・子ども達のいかなる場合においても学びを止めない施設として機能が発揮されていると感じる良い施設であった。 ・地域と連携した実践的な防災教育の推進や、子どもが主体的に関わる仕組みづくりについて検討する必要がある。 ・鳥取市においても、学校外も含めた多様な学びの場の確保や、地域及び外部機関と連携した支援体制の構築を検討する必要がある。 ・鳥取市においても、小中連携の強化を進めるとともに、地域との丁寧な対話を重視した学校再編の在り方について検討する必要がある。 ・教育施策を「学校内」に閉じるのではなく、「地域全体」で支える視点が重要であることを強く認識した。 ・町村合併４町を生かした教育計画の取組に丁寧さが読み取れた。 ・廃校利用による、単なる校舎の利活用にとどまらない取組だった。 ・「自ら生き抜く、ともに生き抜く、未来を生き抜く」ということを子供たちに教えておられること、また、多世代連携としての「ユース防災プロジェクト」など、学生が中心となって新しい防災のかたちを模索されていることは大事なことだと感じた。 ・「学ぶ楽しさ」を実感することで、防災が「義務」から「自分事・社会貢献」へ変わる可能性があることを学ばせていただいた。 ・鳥取市でも地域と連携した実践的な防災教育の推進や、子どもが主体的に地域防災に関わる仕組みづくりについて検討する必要がある。
-----------------	---

BIWAKO AQUA PONICS	○アクアポニックスについて ・本市としても、6次産業化を目指し、SDGsを推進する上でもアクアポニックス農法を十分調査、研究する必要があると痛感した。 ・アクアポニックスがどういうものか、現地で視察させていただき確認できたことは良かった。施設の細かな調整や、どのような魚介や野菜が適当なのかはまだ実証を重ねノウハウを構築する必要があると感じた。事業として現時点で本市で取り組むことは難しいと感じた。 ・オニテナガエビとミニトマトの循環システムは完全に確立していないと感じた。アクアポニックス農法の難しさではと推察する。先進的なアクアポニックス農法が確立され、他地域に広がっていけば、担い手確保と新たな産業創出に寄与できると感じた。 ・今後、商業ベースに乗せるには費用対効果の面で収益が出るベースには程遠いと思いました。補助金ありきの事業展開だと感じています。 ・実際の運用面では、水質や栄養バランスの管理、温度変化への対応など高度な技術が求められるほか、魚と植物双方の生育を同時に成立させる難しさがあり、安定した生産体制の構築には継続的な試行錯誤が不可欠である。 ・鳥取市においては、単なる農業振興として導入を検討するのではなく、教育、観光、環境分野と連携した複合的な取組として位置づけることが重要である。具体的には、学校教育における探究学習の場としての活用や、地域資源と組み合わせた体験型コンテンツの創出、小規模モデルの実証的導入などが有効と考えられる。 ・本視察は、アクアポニックスの可能性と限界の双方を把握する上で有意義であり、今後の施策検討においては、技術導入そのものではなく「どの分野と組み合わせるか」という視点が重要であると考えます。 ・着眼点は興味がある事業であったが、予想以上に手間がかかり部分運用になっていたのは残念。しかし、今後の取組の前例には十分だった事業だと思う。せっかくの事業なのでノウハウは周知されることを期待したい。 ・採算性をクリアできれば良い取組になると感じた。
--------------------	---